

# 身投げした天神さま

烏山町坂下（現那須烏山市城東）におまつりしてある束曲天神さまのおはなしをしまし

よう。むかし、源氏と平家がはげしく戦ったとき、平家が屋島の沖にのがれたときのことです。ある日平家の軍ぜいの中から、日の丸の扇を竿のさきにかかげて、小さな舟をこぎだしてきました。この扇を射おとしてみよというのでしよう。

源氏の大将義経は、大ぜいのつわものの中から、那須与一をえらび、この扇を射おとすことを命じました。

幾万というつわものどもの見ている晴れの場所です。与一は、射そんずれば腹を切るかくごで、馬を海にのり入れたのです。

八百萬の神々をねんじ、矢を射ようとすると、どうしたことから刀の柄がじやまになって射ることができません。

そのとき、フト故郷の城にまつてある天神さまをおもい出しました。

「なむ天神さま、どうぞあの扇を射させたまえ」

と祈ると、アール不思議やいままでじやまになっていた刀の柄が、ギクリと曲つて、射やすくなりました。

与一は、みごと扇を射おとして面目をほどこし、その功によつて、頼朝公から那須の庄の旗頭にされました。

それから幾代もたつて、与一の子孫のものが、天神さまのご恩をわすれ、おまつりどこ

ろか誰もみむきもしくなりました。

天神さまは、大へんおいきりになり、ある年の大水増のとき、城を抜け出して、那珂川にとびこんでしまいました。

そしてながれながれて、烏山町坂下の河原に流れつきました。

これを見つけた坂下の人たちが、

「これはこれはもってねえこっちゃ」

とひろいあげ、いまのところを社をつくり、「束曲天神」さまとしておまつりをするようになりました。

それからというもの、この天神さまのごりやくで、いっぺんも火事がおきたことがないということなのです。